

「成功する病院情報システム導入マニュアル

良質の医療を提供するために

小山 博史 著

広島国際大学医療福祉学部医療経営学科

河 口 豊

この本は、国立がんセンター名誉総長(現横浜労災病院長)・阿部薫先生が推薦の序でも述べているとおり、国立がんセンター中央病院改築にあたり、新棟の情報化を行ううえで、必要であった組織、体制、プロジェクトの管理、システムの考え方などを手順に従って整理解説したものである。ナショナルセンターである国立がんセンター中央病院は特定機能病院であり、国内のがん基幹病院とのネットワークの中心であるとともに、世界的にもネットワークを組んでいる。その情報システムを刷新するために、筆者はまず第一に“「患者のためのシステム作り」ということで気持ちを整理してきた”と視点を明らかにしている。

本書の構成は「はじめに」でこの本の目的とともに、なぜシステム化が必要かを述べ、「組織化と役割」、「システム化とプロジェクトの概要」、「病院の業務と施設の機能モデル」、「病院業務の再編成」、「調達の方法」、「仕様書の作成」、「選定システムの稼働まで」、「要件定義・外部設計・内部設計：システムアナリスト」、

「総合リハーサル」、「システムを育てる」、「システム障害対策」、「病院システムの今後の課題」、へと進められている。

本書の特徴は、① 病院情報システムの導入を検討している病院長、事務長や医療情報部門をもたない病院の開発担当やシステムエンジニアリングの人々を読者対象としている。すなわちユーザーに対する情報化に伴う一連の作業に関する情報提供である。② いかに効率的にシステムを構築し導入・管理していくかを、システム化の行程順に整理し、事例とともに作業項目の注意すべき点を示している。③ 多くの病院では専従職員を配置できないため、院内職員による情報検討委員会を立ち上げてコンサルタントに依頼することになるが、その際にコンサルタントに何を期待し、院内職員は何を決定すべきかを示している。④ 目次からもわかるが、導入後の運用管理、障害対策にも触れており、障害のパターン別に対処方法が整理されているため、既設の情報システムでも参考となる。⑤ 臨床研究、DRG/PPS

などの診療データの二次利用についても触れられ、今後の診療録などの患者情報について取り扱いの示唆を与えている。

本書は121頁のさして厚くないものであるが、このように病院関係者向けのシステム導入の技術書としてわかりやすい言葉で、手順を追って書かれた中味の濃いものと言える。また、“病院の病”を“情報システムという治療法”で解決するという視点、あるいはプロジェクトの進め方はまさに組織の動かし方であり、その本質をついている。更に各章の最後に要旨がまとめられており、重要事項を確認できることはありがたい。

今後更に、“患者のためのシステム作り”から“患者参加の医療のためのシステム作り”へと発展させた導入マニュアルを著して欲しいと願うものである。

● B5 頁136 図11 表54 2000
定価(本体3,000円+税) 円400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)